ポアレ・ツィオンのメンバーは、ソ連でやっと認められた自らの組織の合法性を協定が危険にさらしたと主張して調査を要求したが、ジャボティンスキーは七カ月の講演旅行でアメリカへでかけてしまい、審問の期日も定まらずようやく一九二三年一月一八日という日取りが設定された。ところがジャボティンスキーが証言することになっていた日の前夜、突然世界シオニスト機構から退任し、結局証言聴取もおこなわれなかった。その後も自らの辞任は審問差し止めとは関係がないとジャボティンスキーは言い続け、辞めたのは対英関係の継続した問題のためであると言い立てたが、彼の言を信じる者はほとんどいなかった。彼はその後間もなく世界シオニスト機構の隊列に復帰したが、彼の敵手は、ジャボティンスキーがシオニズム運動内部でもはや何ら地位らしき地位を占めていなかったので、公式にこの問題を追いかけてもそれ以上重要な進展がないものとみなした。彼が新たな動向を組織しはじめると、攻撃も再開され、彼の余生は自らのとっぴな行動を弁護することに費やさねばならなかった。しかし生涯を通じてジャボティンスキーは自らの批判者を尊大な侮蔑をもって遇することで知られた。敵対的世界に対して彼は素っ気なく「私が死ねば諸君は私の墓碑銘に〈この人はペトリューラと協定を結んだ人である〉と書くことができる」[2]と述べている。

「我々はユダヤ帝国を望んでいる」

ジャボティンスキーは今や用心深くなった世界シオニスト機構へ、指導部に対する極右の反対者として復帰し、改訂派のスタンスを「修正」することにした。彼はヴァイツマンがユダヤ軍団の再編成を要求しようとしていないのを非難し、またチャーチルがトランス・ヨルダンをパレスティナのユダヤ「民族郷土」

から分離する決定を出し、世界シオニスト機構がこれを受け入れるのを渋るとジャボティンスキーは規律感覚からこれをただ進んで受け入れながら、それ以降ヨルダンが永遠にユダヤのものという主張を彼の新しい綱領の固定観念にしてしまった。「ヨルダン河のこちら側は我々のもの――向こう側も我々のもの」。シュテイ・ゴダトの歌はこのような歌詞なのだが、この歌によって改訂派の運動の一体感は最もよく保たれたのである。

ジャボティンスキーはパレスティナ人がいつかは外国人による支配をよろこんで受け入れるだろうといったナイーヴな幻想は抱かなかった。ベン＝グリオンとその友人は自分たちのためになるようなかたちにシオニズムをパレスティナ大衆が受け入れてくれるよう説得できるとまだ考えていた時、ジャボティンスキーは味も素っ気もないテーゼを一九二三年の論稿「鉄の壁（我々とアラブ）」の中で書いていた。

> シオニストの植民活動は終止符を打つかそれとも現地住民の意向に反しても実行するかそのどちらかを選ばねばならない。したがってこの植民活動は現地住民からは独立の権力に守られてはじめて継続も進展も可能なのである――現地住民の圧迫を撃退できるような鉄の壁。これこそがアラブに対する我々の政策である。……現在もあるいはまた近い将来も、すすんでアラブと和解することなど全く考えられない。[3]

一方で英軍に自分たちを保護してくれるよう要求しながら、他方で気取って平和を口にするシオニスト指導者など、ただ嘲るに値するのみだというのがジャボティンスキーの立場であった。あるいは改訂派が望むアラブの支配者（具体的に好ましいのはイラクのファイサル）は、パレスティナ大衆の頭越しにシオニ

ストと交渉し、シオニストの要求をアラブの銃剣でもってパレスティナ住民におしつけたがるような人間であった。シオニスト国家への道はただひとつしかありえないと、再三次のような主張を繰り返したのであった。

> 人がすでに住んでいる土地に入植活動したいのであれば、守備隊を準備するか、守備隊供給の意思をもつ「金持ち」あるいは後援者を見つけるかしなければならない。さもなければ植民をあきらめることだ。けだし、この植民活動を破壊阻止するどんな企てをも物理的に不可能にさせる軍隊を欠いては、植民は不可能である。「困難」とか「危険」とかのレベルではなく、そもそも不可能なのだ。……シオニズムはあえて植民活動を強行する冒険的な運動であり、したがってその成否を決めるのは軍隊なのである。……ヘブライ語を話せることも大切だが、さらに大切なのは運の悪いことに射撃ができることだ。さもなければ植民のまねごとをしてそれで終わりだ。[4]

ジャボティンスキーは、シオニストが当面英軍の支えなしにはアラブ住民の攻撃を防ぐほどの力をもっていないと了解していたから、改訂派は声を大にして英帝国の忠実な臣下になった。一九三〇年、改訂派パレスティナ支部のイデオローグだったアッバ・アキメイルは、「イギリス自らが意図しているにもまして改訂派の利害関心は英帝国膨張にある」[5]と明言している。しかし改訂派も必要以上にイギリスの後ろに身を隠しているつもりはなかった。一九三五年、ユダヤ人で或る共産系のジャーナリストがアメリカへ向かう大洋汽船の船上でジャボティンスキーに出会い、インタヴューをとることができた時の話である（このロバート・ゲスナーの記事は『ニュー・マッシズ（新大衆）』に載り、アメリカ・ユダヤ人の話題になった）

が、その時ジャボティンスキーは、改訂派の意図が明らかになるよう率直に話そうと言った。「改訂派は馬鹿正直で容赦なく素朴、それに粗野である。通りに出ていって誰かを――例えば中国人を――つかまえて、何がほしいかと聞いてみればよい。百パーセント、全部ほしいと答えるだろう。それは我々も同じだ。我々はユダヤ人の帝国がほしい。イタリア人、フランス人であれば地中海帝国がほしいのとまさに同じことなのである。[6]」

「サムソンは政治的意思をもった国民の神秘を垣間見た」

英帝国へのメンバーの熱烈な思いがあったにもかかわらず、改訂派は別に新たな帝国の保護者を探さねばならなかった。イギリスはシオニストを護る以上のことはしようとしなかったし、護ること自体あまり効果的になしえなかった。シオニストは土地を少しずつ購入していかねばならなかった。イギリスがシオニストにトランス・ヨルダンを与えるとまじめに信ずる者はいなかった。したがって改訂派は、アラブに対するさらに容赦ない政策に断固専心し、すすんでシオニスト兵営国家建設を支えてくれる新たな委任統治国を模索しはじめたのであった。イタリアはシオニストがファシズムに共感をもってくれるがゆえにというよりはイタリア自身の帝国主義的野望をもつがゆえに、明らかにこれにこたえてくれる存在であるように思われた。ジャボティンスキーは学生時代イタリアで学び、伝統的なリベラル貴族的秩序を愛していた。自分の心の中でジャボティンスキーはユダヤのマッツィーニ、カブール、ガリバルディを全部まとめてひとつにした人物のつもりであって、ムッソリーニがかくも徹底的に拒絶したイタリアのリベラルな伝統の中にまちがった何物も見出すことはできなかった。事実彼はファシズムを皮肉っており、一九二六年

図書館資料は大切に取り扱い、